

小千谷 東忠あて大亦観風書簡 一

A Collected Transcriptions of OMATA Kampu's Letters to Tochu, Ojiya, Niigata I

福田 道宏

FUKUDA Michihito

奥村 一郎

OKUMURA Ichiro

キーワード…大亦観風、日本画、小千谷、パトロネージ

解題—昭和戦前・戦中期、或るパトロネージの形と軌跡—

大正末か、昭和初年のいつかはわからない。まだ若いひとりの日本画家と、新潟は小千谷の老舗料亭主人との出会いから物語ははじまる。

画家の名は大亦観風（一八九四～一九四七）、観風は雅号で本名新治郎。一八九四年（明治二七）、和歌山県和歌山市の生まれで、若くして画家を志し、東京へ出て洋画を学び、のち日本画に転向。その一方で、昭和初年頃から和歌に傾倒、元アララギの歌人古泉千樫に師事して、一九二七年（昭和二）、千樫の没後、門人たちが歌誌『青垣』を創刊すると、その同人となり、翌年の二巻一号から四三年の十七巻まで表紙絵を描き、自ら短歌を発表し、論評などもものした。日本画ははじめ寺崎広業に師事したというが、のち小室翠雲門下に入り、大東南宗院結成にも参加、南画風の独自の画風を切り拓いた。作品は主に個展で発表し、代表作は四〇年第四回個展で発表した『万葉集画撰』（奈良県立万葉文化館所蔵）。四七年、戦後の混乱の中、五十三歳で没したため今では彼の名を知る人は少ない¹⁾。

一方の料亭主人は、小千谷古町にあり、現在まで続く割烹東忠の主人東平三

郎（一八九〇～一九四三）、号して其東楼主。観風より四歳年長で、周囲からの信望厚い小千谷の政財界の実力者であり、自らも俳句と篆刻をよくした趣味人でもあった。東忠は、創業は江戸時代中期と伝え、創業者東忠兵衛の名にちなむ。幕末、長岡藩の河合継之助が、新政府軍との会談前後に休息し、昼食を摂った場所としても知られる。

本稿は、東忠に現存する大亦観風から東平三郎、及び平三郎の没後、彼の妻ひなにあてた書簡類を翻刻するとともに、若干の解題を加えるものである。現在、割烹東忠には六十六通の大亦観風書簡が残っている。二〇〇四年（平成一六）奈良県立万葉文化館における開館三周年記念特別展「万葉を描いた画家大亦観風展」開催にあたり、作品とともに書簡を借用し、調査することとした。その後、奥村・福田で継続的に書簡類の翻刻と検討を進めてきたが、今回はそのうち、一九四〇年までの二十四通を紹介する。

書簡類を通読すると、平三郎と観風が出会い、やがて親交を深めるなか、平三郎の働きかけにより小千谷のひとびとを巻き込みながら、後援者が組織されて、観風の後半の画業を支えていくまで、昭和戦前・戦中期の一人の画家とパトロンの関係とその軌跡が明らかになる。

以下、ここでは今回、翻刻する書簡について、年代順にざっとした内容に触れておく。確認できる限り、最初の書簡は一九三〇年二月五日付の1である。

1 (図7) は毛筆の書状。出雲崎の蟹を贈られた礼状。「ひさしぶりに」「久しくお目にかからず」とあり、これ以前から平三郎と観風には面識があり、「なつかしく」というのだから観風がかつて小千谷に行ったことがあるのは確実。なお、「蟹一作」とあり、本物の蟹の返礼に蟹の絵を贈ったようであるが、作品は現在、東忠には見当たらない。このあと、現存する書簡では三八年一月二十一日付の2まで空白期間がある。おそらく、この間は本当に音信がなかったか、あってもほんのわずかだっただろう。

2 (図8) はキジを贈られた礼状で、その冒頭には「その後、非常にご無沙汰いたしました」、「もう何年もご無沙汰がちで」とある。「もう一寸十年程お目にかゝらない」とあることから、三八年の十年ほど前、つまり昭和初年にはすでに面識があり、それ以前からの付き合いということになる。「お店にみた美しい人達」とは東忠で働く女性たちをさすと考えられ、小千谷、そして、東忠にも確

実に行っていたとわかる。前年、三十七年に「岩田氏」なる人物が上京して、観風と会い、平三郎の噂話をしたというので、小千谷が新潟方面の人物で、共通の知り合いなのだろう。

以下、近況報告がある。「四十といふ年を界として」作品を自分で展覧会を開いて世に問うことにした、と書くが、観風四十歳は三四年に当たり、実際、

以下、近況報告がある。「四十といふ年を界として」作品を自分で展覧会を開いて世に問うことにした、と書くが、観風四十歳は三四年に当たり、実際、



図1 1937年1月5日 大亦観風宅での画悠会新年会 (割烹東忠蔵)

このとし四月十七日から二十三日まで、観風は白木屋で第一回個展を開いている。そう決意したきっかけを観風は、「帝展といふものゝ内部の醜さを暴露してからは、あんな処へ出す気は毛頭なくなり」と記す。数年前と云うので、本書簡に先立つ三年前、三五年の帝国美術院改組(いわゆる松田改組)前後の一連の美術界の紛糾のことをさすのだろう。同年十月、小杉放庵が帝国美術院会員を辞退、翌年二月には改組帝展が開催されたが、六月には再改組があり、同月、横山大観、川端龍子、小室翠雲ら錚々たる画壇の大物も会員を辞退した。なお、この記述は、裏を返すと、改組以前には帝展に出品したこと、もしくは出品しようと思ったことがあったようにも読める。帝展にせよ、現代の日展にせよ、公募展は入選作は確認出来ても、落選作は本人が自己申告しない限り、ふつう明るみに出ることはない³⁾。

「今年五月に又、展覧会をやります」とあるのは、このとし開いた第三回個展「漂流異聞絵詞巻」のことで、「個人展の目録」というのは、三六年の第二回個展をさすものか。「美術雑誌・新聞の批評も相当」と書いているが、たしかに第一回個展は『中央美術』復興第十号附録の『中央美術月報』第三号のほか、『美之国』第十巻第五号・『白日』第八巻第六号にも展覧会評が載り、第二回は『塔影』第十二巻第三号、以後も個展のたびに採り上げられた。

このあと、話題は個展目録とともに同封した写真(図1)の解説になる。写真は「正月の私の画室の新年会です」といい、「驪山画悠会」と名付けた観風画塾の新年会の集合写真で、「尤も素人ばかりですが」とことわりを入れた「画の門人」ほか、多数人名が挙がる。主だったところをほかの資料と照らし合わせると、「東京商科大学の教授」「こんどオーストラリアの大学の教授にゆき」とあるのは、清田龍之助と考えられる。東京商科大学は現在の一橋大学。この年発行の「驪山画悠会拡張趣旨・会規・入会前納会費受納書・画悠会名簿」に豪州ブリスベン大学教授として清田龍之助が顧問として名を連ねる。「三井の重役」は不明だが、「府会議員」はやはり「驪山画悠会拡張趣旨・会規・入会前納会費受納書・画悠会名簿」に、同会代表の渋谷鶴松がいて、この人物か。渋谷は三二年六月十日の東京府会議員選挙に荏原郡選出で当選、三六年六月一日、四〇年六月一〇日の選挙でも目黒区選出で当選。四二年三月三十一日付の39によれば「こんど代議士に出る」というがその後は未詳。

「中学の校長」は不明だが、「幹事二人」は四二年時点で、岩村博と窪田宇佐

美の名が確認できる。岩村博は四一年から四二年に赤羽尋常小学校(現港区立)の校長を勤めた人物と同名。窪田宇佐美は、東京荏原郡 旭尋常小学校(現世田谷区立)の初代校長(一九二六〜三一年)、源氏前尋常小学校(現品川区立)の二代校長、東京 伊藤尋常小学校(現品川区立)の校長(一九三九〜四三年)を歴任した人物か。「小出君」は、頻出するが不明。東京在住か。後述するように、平三郎と知り合った当時から共通の知人らしい。三九年九月二十八日付の8には、店をたんで渋谷に引越したとある。四一年五月十八日付の30によると、平三郎の支慰問の見送りに「渋谷の御妹」が来ていて観風と会っており、「渋谷」が地名とすれば、平三郎かひなの妹の夫とも考えられる。

次に3(図9)はさらに一年後の三九年一月二十七日付である。「時局柄」、年賀状も遠慮したとあり、この書簡は、また鴨や山鳥を贈られたことへの礼状。ここにも「最早十幾年にも相成候か」と、小千谷に行つて以来の年月を記す。この記述からも、観風と小千谷のつながりは昭和初年以前に求められることになる。東忠には一九二五年(大正十四)の作品が三点伝わっており、このとしが最初の訪問と出会いの年かもしれない。

「昨秋、多分御返信がはりにもと、小生の個人展覧会、御通知申上候」というが、東忠には案内状は現存せず、目録(図2)のみ現存する。三八年第三回大亦観風個展「漂流異聞絵詞巻」の目録で、本人も「全く意外なほど反響」と語るように多数の美術雑誌等に採り上げられた。『美乃国』一四巻一二号に「大亦観風個展(無記名)」「大亦観風氏日本画展」(芝清福)、『塔影』一五巻一号に「大亦観風氏第三回個展 漂流異聞絵詞巻」(無記名)、

「近藤浩一路氏個展、神庭白黎氏個展、丹阿弥岩吉氏個展、大亦観風氏第三回個展」(富田啓子)などの評が載った。いずれも好意的なもの。「こゝまで賞められるとチト冷汗をかき」そうだと書いてはいるが、もちろん嬉しかったのだろう、「御手紙と全時に美術雑誌のうちの一冊を御別送」という。これを認めている二十七日から二日後の二十九日は「此の前写真」、つまり2に同封の画塾の新年会の写真と同様、このとしも新年会をすることになっているという。前年の個展についての報告と自らの宣伝もして、今年あたりは小千谷に再



図2 第三回大亦観風個展「漂流異聞絵詞巻」の目録(割烹東忠蔵)

度訪ねたいと述べる。ここから、東忠主人東平三郎の観風への後援が本格化する。

4は3の二箇月後、四月十日付。「御帰国後」「御上京の中」とあるので、3とこの4の間に、平三郎が上京していらしい。3での小千谷再訪の望みをかなえるべく、平三郎は、小千谷で知己に観風を宣伝もしていらしい。平三郎の上京中に、四月末か五月ころから小千谷再訪で、ほぼ合意が出来ているようである。平三郎からは小千谷に帰って以降、手紙をもらわないが、「島田氏・及高野氏より御手紙頂戴、作品御届け被下った事、御宣伝頂いた事を拝承」とあり、平三郎は小千谷の島田・高野なる人物に観風を宣伝もし、託された作品を届けている。「島田氏」は頻出するが不詳。四三年、小千谷の観風の後援会組織と考えられる「洗心会」主催で「回天老」とも書く「島田老」の喜寿祝賀の展覧会が企画されており、同一人物か。一方、「高野氏」も頻出し、鮭など贈られるが不明。「貴館の襖」とは平三郎が営む東忠の襖を張り替えたらそこに揮毫したいということのようだが、現存せず、これは実現しなかったものと考えられる。「実業」の小林氏は直後に「新聞の方もよろしく」と書くので、新聞社とその関係者らしいが不明。

5は印刷された礼状で三十九年九月付。現状では、四〇年一月四日付の15に同封されているが、帰京後、小千谷滞在中、世話になった人々に送ったもの。

6は小千谷から帰京後、観風が三十九年九月十日、湯治のため新潟県中里村の小出温泉に滞在中の平三郎に宛てた礼状。観風が帰るのを見届けたのち、湯治に出かけたものらしい。「此度の三ヶ月にわたる永い間、最初の日から、最も終りの出発まで、少しも変らない御心尽し」とあり、小千谷滞在は三箇月にも及んだという。その間、平三郎は物心両面で観風を支え、知己に紹介し、作品を斡旋したりもしたようである。帰りの汽車にわざわざ見送りのため乗り込んできたという「長岡の木村さん」は、前後の文脈から、小千谷滞在中に平三郎の仲介で観風に作品を依頼した人物だが不明。このあとしばらく木村の画料遅延の件で登場する。ちなみに、木村が引き受けるか保留にしている作品らしい《清津峡》の画題になっている清津峡は新潟県中里村にあり、小出温泉からも程近い名勝。封筒の宛所は小出温泉の「古屋旅館」となっているが、中里村観光協会によると、二〇〇二年ころ廃業したという。

続く7は6で「非常に御骨折頂いた全部の高とか数とかを一度計出してお目

にかけ」たいが、まだ計算出来ていないから次の手紙でと予告した、小千谷滞在中の依頼作品数と、その画料の報告である。三十九年九月十四日付。「十二日出発されたそうですね」とあるのは、前便6を投函した十日の時点ではまだ、平三郎は小千谷におり、十二日になって小出温泉行ったということを報らされたのだろう。小千谷で依頼を受けた作品総数と金額を書き上げており、小千谷二十六点、長岡十点、そのほかに「中島や」、「長岡 森本与兵衛」が未定だが各一点の三十八点という。

「中島や」は小千谷市の中島屋旅館のことと考えられる。ここに出てくる額装の作品ではなく、軸装の《おはじきで遊ぶ遊女》一幅を所蔵していたが、新潟県中越地震後、廃業した。作品は奈良県立万葉文化館に寄贈された。本作については量が縦一三三・八センチメートル、横二二・五センチメートルであり、四〇年一月四日付の15に「七、八寸巾の長い幅」、一月二十六日付の16に「小品七、八寸巾のタテのもの一作送り申候間、御序で御笑覧被下度候。図は、上に良寛と弟由之との問答歌をかき、下には遊び女がはじきをしてゐる図に御座候」とあり、これを指すものだろう。この九月十四日の時点ですでに入金のあった分は千三百九十円、小千谷・長岡で各二軒五十円ずつが未入金という。このあとの書簡を読むと、画料の一部は平三郎が立て替えたものもあるようである。三箇月間もの滞在中の宿泊費、食費、宴席費なども平三郎の厚意だった。本状によると当時、観風は「七百五十拾円」ほどの借金をしており、その返済が出来たとあるし、さらには、これが翌年の第四回個展「万葉集画撰展」に向けての準備資金になった。これを現在の価値になおすと、約千倍くらい⁴⁾。

8は九月二十八日付の書簡。封筒表には貼り紙をはがした跡がある。「御手紙を出すと三日もかゝり小包は四日位かゝる様子なのでいつも、もう帰宅された後かと案じながらの有様」、「もう十二日から大かた十七日目になります、この手紙ももう御帰りになった後へつくかもしれません」と観風本人が予想したように、平三郎が湯治から小千谷に帰宅したあとで届き、旅館からの転送を受け取ったものと思われる。「絵はがきの御高吟」とあり、平三郎から観風へ前便7に対する絵葉書の返信があったものらしい。観風は平三郎の句を添削している。ちなみに東忠所蔵《東平三郎像》には秋田県鹿角町の大湯温泉での句「河鹿なくいで湯の夜や 筆洗ふ」の賛がある。湯治場での無聊を慰めるべく送った「図録」は観風作品が載るものだろうが不明。「獅子舞をかいて」とは東忠蔵

《豊年楽》がそれにあた
るだろう。毎年七月十四
日に行われる小千谷の二
荒山神社の祭で、観風は
このとしの滞在中に実際
に見物したらしく、獅子
舞とともに東忠の庭で
撮った写真も残っている
(図3)。また、これ以外
にも数件描いている。

9は十月九日付。話題
は主に画料入金遅延や、
依頼で描き、すでに納め
た絵が返送されたなどと
いったトラブルである。
平三郎に相談し、平三郎
から督促してほしいとも
頼んでいる。こうしてみ
ると、観風は比較的せつ

かちな性格だったようである。また、依頼者の多くが平三郎からの紹介である
ことを考えるなら、知己について苦言を呈したり、督促を依頼したりする点は
少々無神経と言えなくもない。そのためではないのだろうか、続く10・11では
平三郎からの返信が来ないことで、観風は気を揉むことになる。

10は十月二十九日付、11は十一月八日付の書簡で、やはりトラブルが話題の
中心だが、小出温泉から帰宅後、平三郎からは返信がなかったようである。10
では「御便りを頂かないので、如何かと案じて居ります」といい、多忙なのだ
ろうと推測するが、具合が悪いのか、それとも「先達上げた手紙にウツカリ失
礼の事でもかいたかとも心配して居りますが、何卒不行届の処がありました
ら、不悪御願ひ申上ます」と自分が気分を害したかと心配している。11では
「その後、一向御手紙を頂戴いたしませんので、非常に心配致して居ります」
といい、忙しいのだから、「若し御健康だったら葉書位は御多用でも一寸頂け



図3 1939年7月14日 東忠にて東平三郎と大亦観風 (割烹東忠蔵)

るのではないかと考へると、之は何か小生に落度があつて、御不快されてゐる
のではないか。或は誰れかつまらぬ中傷か何かあつて(そんな覚えもありませ
んが)、立腹されてゐるのではないか」と書き送っている。

なお、10には「照専寺様の方丈さん」が登場し、手紙をもらったという。照
専寺は小千谷市平成にあり、書簡類から見て小千谷の有力な後援者のひとりで
ある。二〇〇四年の展覧会の際には未調査だったが、二〇〇七年、奥村・福田
で調査に伺った。その結果、軸装三幅のほか色紙、扇面、画帖など十五点が見
付かった。新発見の小千谷作品の紹介は別稿に期することにした。

12は二枚からなる印刷物で「1」は大亦観風画伯揮毫会案内と「2」第三回観
風個展成果抄からなる。「1」は奉書に印刷。このとしの十一月付で、観風を後
援するため、揮毫会を催すという。「官展二ハ一顧モ与ヘズ」とあり、これを信
ずるなら文展・帝展には一度も出品していないことになるが、先述のと
おりこれについては考へてみる必要がある。揮毫料は尺三が百円、尺五が百二
十円。同封の葉書で返信するようにとあるが、現存せず、葉書は平三郎が使用
したものか。本文中に「別紙第三回個展批判抄」とあり、「2」がもともとセツ
トだったとわかる。その「2」は美術雑誌などの展覧会評を抄録したもの。た
だし、ここに載る以外にも、『美之国』第十四卷第十二号・『塔影』第十五卷第
一号にも記事があるが、採録しない。つまり、二誌の当該号発刊以前、「1」と
同時期に刷られたものと考えられる。

13は年の瀬も押し迫った十二月二十一日付である。平三郎から返信をもらつ
て、機嫌を損ねたかという心配はおさまったようである。「先月二十三日頃御葉
書頂戴、その後頂戴せず」というので、11から二週間ほどして平三郎は葉書を
投函したようである。トラブルはまだ続いているが、観風も少しは頭を冷やし、
以前ほど激昂しておらず、半ば諦めムードすら漂う。

ここで興味深いのは「松月の菓子の包紙とか何とか希望の様に貴家より伺候
が(或はきゝあやまりか)何時にても大ききわかり候はゞ描き可申候」という
件りである。「松月」は小千谷市の老舗和菓子店の松月堂喜三兵衛である。観風
作品を所蔵するほか、現在でも商品の包み紙に観風が描いたものを使ってい
る。小千谷市内にはほかにも多数の観風作品が残るが、彼の名が没後、風化し
てゆくなかでも小千谷の人々はこの画家を忘れずに、愛し続けた。和菓子の包
紙もそれを示していると言えるだろう。



図4 1940年第四回大亦観風個展「万葉集画撰展」(割烹東忠蔵)

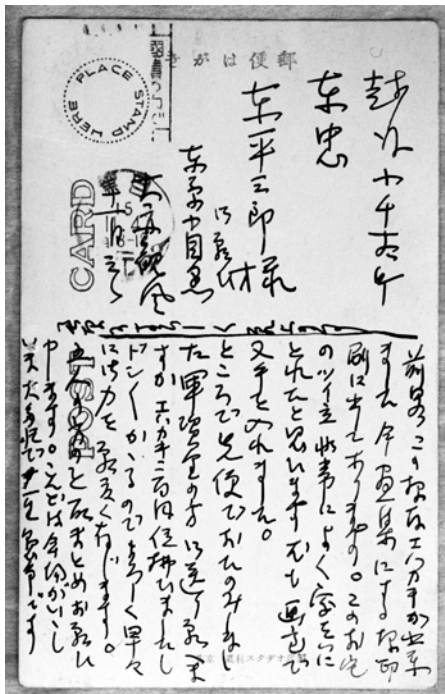
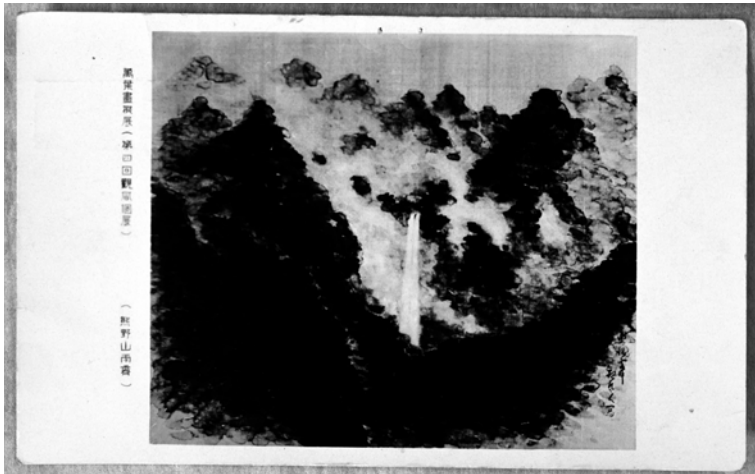


図5 《熊野山雨霽》絵葉書(書簡23、割烹東忠蔵)

14は書簡ではなく、また、恐らく、郵送されたものでもない。観風の名刺の裏に手書きで書き込んだもので、驪山画悠会の会員「松沢豊」が訪ねるので宜しく、という内容。13によれば松沢は幹事をしており、役所勤めのように、「画悠会々員中の幹事を致居候松沢豊君、この一月一日に湯沢にゆく由。役所の連中とのスキー会に候が、その間「御近くにて候はゞ東忠様に御訪問致度」と申居候。多分四、五日までの間の事と存候。その節はよろしく願上候」とある。翌る四〇年一月一日から松沢は同僚と越後湯沢にスキーに出かけ、東忠にも寄りたい、と言うので、観風から紹介したのだろう。「昨年正月御会ひ」というので、平三郎は三九年の上京の折に会ったものと見られる。現状では四〇年一月四日付の15に同封してあるが、松沢が訪ねた折に、紹介状代わりに持参したのだろう。

その15は年賀状で一月二日にペンを執ったが、中断して四日の深夜というか、五日の未明に追記したもの。懸案の画料トラブルについては平三郎から八十円の送金があり、平三郎自身が木村・中島屋に向いて交渉するなど取り持ってくれたという。十二月三十日に手紙と八十円、元日には鮭と鴨を贈られ、その礼状を兼ねている。本状で興味深いのは、「小杉放菴老」から新年会に招かれていた点だろう。放菴は洋画家(一八八一〜一九六四)で、観風も私淑していた。第四回個展「万葉集画撰展」にも推薦の辞を寄せてもいる。現状では、封筒には前出の5・14を同封する。

16は13から15に出てきた「松沢君」からの土産話を聞いて、厚遇の礼と新年会などの報告。先述のとおり中島屋旅館旧蔵の《おはじきで遊ぶ遊女》の記述もある。ここまでで話題になっていた「小出君」が銀座に出したという天麴羅

屋「清月」の話題などがある。

17は印刷で三月三十一日付の18に同封されていたものだろう。ここから、このとし開催の第四回個展(図4)に向けての動きが活発になる。この間の経緯については紙数も尽きてきたので最低限の解題にとどめる。福田「大亦観風《万葉集画撰》と小千谷」⁵⁾で若干触れたので参照されたい。17に挙がる推薦人たちは錚々たる顔ぶれで、結論から言えば、このころこそが絶頂期だったかもしれない。しかし、現実には資金繰りはなかなか厳しかった。そもそも展覧

会の中心《万葉集画撰》は『万葉集』から選んだ歌を絵画化するもので、そのためには日本の各地の歌枕を踏査する必要があった。三九年時点の決して小額とは言えない借金も、恐らく、自弁しなければならぬ、これ以前の個展の開催費用が一因だろう。18では「歌人の大家達に相談」したと書くが、斎藤茂吉・折口信夫・武田祐吉などのことか。開催にあたって推薦の辞をもらい、のちに刊行の際には歌の解説の分担執筆をしてもらっている⁶⁾。小千谷で後援を頼む相手は観風自身が五軒に絞っており、「貴家と、高野様・小出様・田中様・照専寺様」と書き、平三郎に周旋を依頼している。

六月二十七日付の19を見ると、五月か六月、観風は小千谷を再訪した。目的は18に越中の歌枕を訪ねることというが、後援者を募るためでもあるだろう。しかし、簡単には運ばなかったようで、続く20から23でも、平三郎を除く四軒への口利きを頼んでいる。また、八月二十二日付の20では東忠に現存する《熊野山雨霽》を出品のため借りたいと依頼、十月五日付の21によると、現在軸装の本作はもとと衝立で、同日、鉄路で東京の観風の許に

届けられた。のち、四一年の大阪での展覧会で輸送のために平三郎に頼み、軸装に改めてもらうことになる。十月二十五日付の22もオープンを一ヶ月後にひかえて後援の依頼である。十一月四日付の23は《熊野山雨霽》を展覧会用に絵葉書にして平三郎に送ったもの(図5)。ちなみに21は現状、十月二十五日付の封筒に入っているが、同日付の22(四一年十一月二十二日付の33に同封)が別にあるので、封筒と中身が入れ替わっている。最後に24だが、封筒に印刷物「第四回観風個展万葉集画撰展覧会目録」(図6)のみを封入し、手紙はない。



図6 第四回大亦観風個展「万葉集画撰」の目録(書簡24、割烹東忠蔵)

一九四一年以降の書簡類の紹介は次稿に回すこととし、以下、翻刻して紹介することにする。

凡例

- 一、掲載順は現存のものの年代順とし、不明のものは内容などをもとに推定し配列した。
- 二、かな遣い等は原文のままとしたが、旧字等は現在通用のものに改め、句読点を補った。また、誤字・当て字や、意味の取りづらい箇所については、当該箇所の左傍に「」内に正しい字やふりがなを補った。
- 三、不適當と思われる表現も、当時の時代状況を考える上で貴重なものと考え、原文のままとした。
- 四、個人情報にかかわる、公刊に不適切な箇所は一部略してある。

翻刻——一九三〇年から一九三九年——

一九三〇年（昭和五）

1 二月五日付

拝復、正月もはやすぎ申し候得共、雪の国よりの御便りひさしぶりにて拝見、嬉れしく存候、ことに出雲崎のかに沢山御恵与にあづかり何よりに御座候、早々御礼申上候、おかけさま蟹にてこのうそ寒き如月を一杯やり申し候、友人にもわけ与へそこいら中、濡^{うる}ほひ申し候事に御座候、御地のいま時分の雪さこそと存候、いまも忘れぬは越後のこたつの味はひ、この中にてわるい事もよい事もたくらまれ候事を思はじ、そぞろ小千谷なつかくしく存候、久しくお目にかゝらず候が御内室様によりしく願上候、終りに蟹一作お目かけ申し候、

二月五日

東平三郎様

大亦観風

「封筒、消印 [5.2.5]」

越後小千谷町

東忠楼

東平三郎様

「封筒裏」

二月五日

東京市目黒九六〇
大亦観風

一九三八年（昭和一三）

2 一月二十一日付

拝啓。

その後、非常にご無沙汰いたしました。昨年、岩田氏が上京された時、久振りで御噂さを伺った位で、もう何年もご無沙汰がちで、何とも相済みません。益々御盛大の様子伺ひますが、御喜び申上げて居ります。皆々様御壮健ですか。もう一寸十年程お目にかゝらないので、何からお話していゝやら。

お店にゐた美しい人達もお嫁さんになったり、奥様になったりで、もう誰れも知らないひとばかりだろうナと、フト思ひ出しました。何しろ余り永ずぎるので一度久々で行きたいナと思ひますが、機会がなくて。

さて、此程は非常におめづらしいものを頂戴いたしました。あけるまで何んだろうかと評議した事だったので、あけて本当に思ひもかけない、美しい、立派な雉二羽。驚いた心と御懇情とを一ぱいに感じました。難有^{ありがた}く厚く御礼申上ます。早速頂きました。親類へも御福わけをしてやって皆で大喜びを致しました。

何とも御礼の申上様ありません。奥様にもわけてよろしく御申上げ下さい。

×

×

さて、その後のお話をしますが、私の仕事の方面では、四十といふ年を界^{「さかい」}として、自分の画は自分で展覧会を開いて、一般及び美術界の批評を問ふという事に肚をきめて、他をかへり見ず猛烈にやって居ります。新聞で御承知の様に数年前から帝展といふものゝ内部の醜さを暴露してからは、あんな処へ出す気は

毛頭なくなり、『百万の敵も我一人往かん』の意気でやって居ります。男の四十を越した年は、何の方面でもですが、働き盛り、技でこい、頭でこい、肚でこいだ。

これは大分メートルが上がりましたが。幸ひに美術雑誌・新聞の批評も相当なので、いよく図にのつてゐるといふ有様。兜の緒をしめる心持は、然し忘れずにもつてゐますが。

マア別送しました個人展の目録を御高覧下さい。今年五月に又、展ラン会をやります。金屏風六曲一双、金屏二曲半双、二曲屏風三双、他に相当の大きサのもの十点程で開催するつもりです。一人でかいたものだけを並べるのですから一寸大変です。こんなに屏風の多い個人展はそうない事だけは確です。矢でも鉄砲でも来いの意気込です。

全時に個展目録と一緒にお目にかけましたのは、正月の私の画室の新年会で。こゝに並んでゐるのは皆、私の画の門下ですが（尤も素人ばかりですが）。この場所は宅の玄関前の庭池の前です。真中の高い腕組が小生。「ナントまあお年のとつたことδεう」なんて云はない下さい。之でもチョット二上りなんかやると、大分若くなるんだから。私の前の西洋人のやうなのが、親友で東京商科大学の教授、こんどオーストラリアの大学の教授にゆきます。間の一人おいて、その左隣が三井の重役、又一人おいて、府会議員、その隣が中学の校長、前の老人が俳人、私の右側も俳人、うしろが三井物産の社員、前列の方の人は官吏、これでまだ来なかつた人が数人、婦人の方でも四、五人あります。毎月、日をきめて習ひにくるのですが、仲々皆上達して来ます。驪山画悠会といふ名がついて、幹事二人ですべてをやつてゐるといふ有様です。この中に子供も家内もゐますが、どれだかあてゝおいて下さい。

さて、こんなことを書いてるとキリがありませんが、こんなものでも久し振りのなつかしさとして御覧下さい。

それから近日、一つ快作をお目にかけます。御懇情に対する感謝の心持としては、幾分一にも価しませんが、マア久し振りの作品、この位の仕事をしてゐる処を御高覧下されば幸甚です。

では、何れ又、皆様によろしく。

そのうち機会が出来ましたら是非伺ひ度く思ひます。何となくなつかしく思ひます。アノ玉突で、と思ひますと、小出君に銀座で

一寸逢いました。こんど御上京なすつたら、是非御立寄願上ます。では、不取敢、御礼まで。草々

大亦生

東平三郎様侍史

〔封筒、消印「13.1.22」〕

新潟県小千谷町

東忠

東平三郎様侍史

東京市目黒区中目黒三ノ九六〇

大亦観風

〔以下封筒の差出人・住所は略す〕

〔封筒裏〕

一月廿一日

一九三九年（昭和一四）

3 一月二十七日付

拜啓。御無沙汰申上居候。今年は時局柄御年始状も無礼申上候が皆々様御健在の御事と奉拝察居候。さて此程はまた御珍しき鴨・山鳥御送与、難有厚く御礼申上候。子供達大喜びにて珍しさにはね上り居申候。早速その日、友人にも電話をかけ翌晩一杯をかたむけ候。誠においしく珍重致候。御懇情こゝに厚く御礼申上候。

早速御礼状差上べきの処ゆつくり長い御手紙も書き度と存居候うち段々相おくれ御申しわけ御座無候。

御懇情の鳥を味ひつゝ思ふことはやはり雪の国の御地の有様、皆々様の御様子。最早十幾年にも相成候か。しきりに御目にかゝり度き思ひ致候。只今はスキーが盛に候や。雪の国の本当の味は未だ乍残念機を不得居候も今は五、六尺も御座候や。一丈程も有之候にや。絵はがきにて拝見致候だけに御座候。

さて昨秋、多分御返信がはりにもと小生の個人展覧会御通知申上候が、此度の個人展は全く意外なほど反響有之、各新聞、美術雑誌等全く文字通り筆をそろ

へての好評にてまづ「事まず」よかりし事と存候。小生は小生一個の考へありて帝展・文展は絶対出さぬ、自分は自分で押し通す覚悟にて御座候が、かくの如き反響「これあり」有之候てはいよく断じて「観風は観風一個でゆく」肚をかため居候。只今この御手紙と全時に美術雑誌のうちの一冊を御別送申上候が序で御御高覧被下度。こゝまで賞められるとチト冷汗をかき可申候が（帝展の特選どころのこと）でなく日本でも指折の様の事申され何とも苦笑とこそばゆさを感じ居候）お笑ひ草まで差上げ申候。御知友にも御話被下度候。

次にこの二十九日は此の前写真にて御目にかけて候様の小生画塾の新年会にて又賑ふ事と存候。凡ては幹事にて致くれ候事とて別に忙しき事も御座無候も面白き雅人の会に御座候。御近くならば貴家も是非御一緒ならばとも存候。こういふ会を小生又御地へ参上の節にでも出来候はゞとも存候。

実は久々曾遊の御地に皆々様にも御面謁を致度、春頃にても再遊致度心持しきりに致居候が何れはいろく御厚配給る事と相成候はゞ。貴家より他、御座無候が何卒よろしく御願申上度と存候。一つ久々御厚配相賜り被下候や。

扱て次にこの度の御懇情に接し、又寸志の心持にて一作、之より相こゝろみ可申と存居候。出来上り次第、御送付申上候間、御期待被下度候。

先ハ不取敢御礼旁々近況まで。草々。

敬具

一月廿七日

大亦観風

東平三郎様

侍史

「封筒、消印」[4.1.27]

新潟県小千谷町

東忠楼

東平三郎様

「封筒裏」

一月廿七日

4 四月十日付

拝啓、その後すっかり御無沙汰をいたしました。当地は漸く昨日来の好天気です。桜も一度にひらき春らしくなりました。然し数日前、小雪が降り冬に逆もどりの様な日もありましたが、やっと定まった様です。

御地は如何。まだ雪がとけずにその俟てですか。皆様御壮健ですか。一寸暖かくなりかけに風邪を引いたりするものですが、御自愛を願ひます。

さて御帰国後、お便りも頂戴せずに居りますので御様子もわかりませんが、島田氏・及高野氏より御手紙頂戴、作品御届け被下つた事、御宣伝頂いた事を拝承、感謝いたして居ります。厚く御礼申上ます。

さて御上京の中は、これといふ御かまひも出来ませず、心には思ひながらも、思ふにまかせず、無礼ばかりで相すみません。不悪御願申上ます。さてその節いろく御厚配を願ひました御地への久々の御訪問、この月末か来月頃にと心がまへを致して居り、楽しみにして居りますが、何分よろしく御願申上ます。

ついては過日も御話申上ました様に貴館の襖にても御張かへ置き頂きますならば又御希望の画題もありますならば今から御申聞被下ばウンとこちらで下画の材料を集め用意して参り、立派なものをかいて差上げ度いと思つて居ります。尚、他の有力な方々のも或は御懇意な間柄の方々の襖・屏風にてもあらば何よりと存じます。御多用中恐縮ですが御尽力御願申上ます。

画卷も持参して、皆様に御高覧頂き度とも存じます。又只今の日本精神高揚の時のこと日本画独特の芸術精神も講演致し度と存じて居ります。

ともかく何もかも御願申すより外ありませんが、大体の方針、御きめくださいましたらならば「実業」の小林氏にも御話して下すって新聞の方もよろしく御願ひ申上ます。半月ほど前から宣伝しておく方がよくはないかと存じます。先は御願ひ旁々御伺ひまで。そちらへ伺へば何かと御面倒で恐縮に存じます。が、奥様にも何卒よろしく御願申上ます。

あの頂戴の御蘭、この頃、長い鉢にかへて丹精して居ります。では不取敢。草々。

十日

大亦観風

東平三郎様侍史

「封筒、消印 [14.4.10]」

新潟県北魚沼郡小千谷町

東忠楼

東平三郎様

侍史

「封筒裏」

四月十日

5 九月付礼状（印刷）

謹啓

残暑の候高堂益々御清穆奉大賀候

陳者此度御地滞在中は深甚なる御懇情を忝

し候段難有厚く御礼申上候尚今後共宜敷御

交誼御指導之榮を賜度奉懇願候

自然御上京の節も候はゞ御来遊賜度相待上

居候

帰京以来俗用山積為に思ふに不任乍失礼以

寸楮不取敢御礼御挨拶如斯に御座候 敬白

二伸 尚時局柄御年賀状之儀は御遠慮可致候も不悪御願申上候

昭和十四年九月

東京市目黒区中目黒三ノ九六〇

大亦観風

6 九月十日付（一九三九年か）

拝啓。今、小出の湯であられることゝ思つて之をかきます。如何です、お湯は少しはよい様ですか。御自愛を願ひます。どうかよくなられる様にお祈りして居ります。そこではお天気でもよいと川原や野原を相手にあちこち遊べますが、雨にでもなれると一人ではさぞかしと案じて居ります。普通なら酒でもといふ処ですが、それがいけないのだからどうも仕様がないですね。何か慰みになる様なものでも考へてお送りしませう。お話の香合もお送りいたします。

さてこの度は非常に御厄介になりました。全く兄弟でも出来ない、本当に出来ない、親身以上の御親切を頂きました。御礼の申様（まうらひ）ありません。殊に何かと御散財をさせて御氣の毒でなりません。必ずこの御恩報じを致す覚悟で居ります。絶大な御後援を頂いた御返し（ご返し）の出来る時を近い将来に得たいと思つて居ります。盛に勉強をやります。此頃、自分で信じてゐる事は「やれば必ず、やれる」といふ事です。出来ないのは努力が足りないのだといふ事になります。あせらずに必ずやりとげます。

此度の三ヶ月にわたる永い間、最初の日から最も終りの出発まで少しも変らない御心尽し、何とも御礼の申様（まうらひ）ありません。殊にいろいろの御大切のもの頂戴、又御見送り頂きまして、厚く御礼申上ます。あの日、乗る時は暑かったが、トンネルを越すと急に寒い位にかわり、東京へ来ると曇つてゐて今でも降つたり止んだりのイヤな天気です。じめ／＼して。

あの汽車で偶然にも長岡の木村さんが乗つてゐて、小千谷の誰れとかにきいたといつてわざ／＼来てくれました。食堂でいろいろ話をしました。その時、東忠さんで「唐美人」の参拾円を御立替被下つた事（たがはつたこと）も話し、同画料は東忠さんへ送つてくれと頼んでおきました。只今、礼状を出しましたが、尚、それを書添へておきました。「清津峡」のもよく頼んでおきましたが、五、六日してからとの事でした。

こんど小千谷で仕込んだ画材をたねに盛にやる事を楽しんで居ります。こんどはマア永い間、御厄介になりましたが、御蔭様で、御厚意に反（そむ）いて御名前をけがす様な事がなかつた事を喜んで居ります。万一そんな事が出来てはならぬと氣をつけて居りましたが、どうやら無事に過ぎました。そんなのは大体、女の問題に多い様ですが、それだけは丸でなかつたから安心。従つてさっぱりしてゐるが、お蔭で昔の坊さんのやうで、寂寥たるものですが。むつかしい事が出来なくて結構。

それから次回の個展の事についてもいろいろ御心配を賜りまして、之こそ何と御礼申上げてよろしいやら言葉ありません。厚く御礼申上ます。尚、何卒よろしく御願ひ申上ます。

あの暖簾の字、あれでよろしかったらあの字を写真にとつて名刺の裏へでも何へでも縮写して御利用被下（くんだされ）ば結構です。一種の商標見たやうなつもりで。暖簾に出来上つた頃に又見たいものです。それからあの高野さんに頂いた鮭はど

うやらしたらよいのでしたかね。御序ついでもありましたら、方法も二色程でも教へて下さい。ウスク下して味りんでどうかするのでしたね。

さて、非常に御骨折頂いた全部の高とか数とかを一度計出してお目にかけ度いと思つてゐるのですがそれはまだ出来てないので、後からお目にかけます。マアとりあへず此度の御懇情の御礼までを申上しました。何れ又後より。御身御大切に願ひます。

九月十日

東平三郎様侍史

大亦観風

「封筒、切手をはがしてあるため消印は日付「」のみ」

新潟県中魚沼郡倉俣村

字小出 温泉 古屋旅館内

東平三郎様

侍史

「封筒裏」

九月十日

7 九月十四日付（一九三九年か）

前略。十二日出発されたそうですね。そちらで僕の手紙を受取ってくれましたか。どうか温泉で胃の方がよくなれる様に祈つて居ります。御大切に下さい。昨日朝、雑誌を二冊とお話の香合とを御送り致しました（香合は無事つきましたでせうか）。之も御受取り下さいましたか。雑誌はごく肩のこらぬ物を選んで、雨の降った日と独りでおとなしく寝る前に、とのつもりです。何か食べもので胃によいものがあればお送りしたいと思ひますが、いま考へてゐるところ。何しろ温泉には何もない処だから。然し相当仕込んで行かれた事も用意の程を奥さんからの御便りで伺ひましたが。然し注文して下すたら直ぐお送りします。大体何日位の予定ですか（胃の病気には食べるものがなくて困りますね）。二週間とか云はれてましたが、あそこで二週間辛抱出来るかしらと案じられる位。僕だったらマアだめだなと思ひましたが、然し少しでも永く辛抱さ

れて早くよくなつて下さい。

今日、島田氏へ御話の程度をのりの詰合せを贈呈しておきました。

さて此度は本当に御厄介になりました。御礼の申様ありません。こんなに御厚遇をして頂いた事は始めてです。有難く肝に銘じて居ります。必ずよい仕事をして御恩報じをいたします。帰京してまだ毎日ごた／＼してゐて荷物も画室へブチマケた俵です。この度御厄介になつた高を計算して見ましたら、ざつとこんな風です。

小千谷 式十六点
長岡 十点

外二未定のもの

中島や 額一
長岡 森本与兵衛様 一

計三十八点（御世話頂いたものの数）

右の数に対する現在の入金、千三百九拾円。

他二未入金のもの 長岡 五〇・ 坂井氏
小千谷 五〇・ 木村氏分
五〇・ 中野氏
中島や分

右の方、全部入金になれば千六百円になりますがマア大体千五百円と計算しても此度は如何に御骨折、御後援頂いたかを感謝に堪へません。厚く御礼申します。御蔭様で七百五拾円程の借金も返済いたしましたし、三月分のいろ／＼の費用、旅費も入れて式百三拾五円程も支弁出来ました事を喜んで居ります。殊に家内にも話して共に感激して御礼の申上様もない事は三ヶ月分の食費の事、長岡・小千谷の宴会の費用、講演会の印刷その他の費用、みんな大変な御散財をかけてしまひましてその俵になつて居ります事を御申訳けもなく思つて居ります。厚く御礼を申上します。以上で大略結果の報告です。

然し小千谷で描いた全部の作品の数は八拾何点かになりませうと思ひます。御蔭様で永滞在にも不拘、皆様に御好遇を頂きましたのは偏に貴家の御力と深く喜んで居ります。何度繰り返して御礼を申しても全く足りませんが、この上は一生懸命にやつて御礼の代りに致します。では又御便りを上げますが何卒御身御大切に願ひます。では失礼。

只今後十一時五分です。庭には秋の虫が鳴いていっぱいです。今日から

庭の手入をはじめて障紙^{障子}とか畳とかこれから冬への支度にかゝります。

九月十四日

大亦観風

東平三郎様

侍史

「封筒、切手をはがしてあるため消印は日付「15」のみ」

新潟県中魚沼郡倉俣村大字小出

小出温泉 古屋旅館内

東平三郎様

侍史

「封筒裏」

九月十四日夜

8 九月二十八日付

拝啓。御手紙を出す前三日もかゝり小包は四日位かゝる様子なのでいつも、もう帰宅された後かと案じながらの有様です。それで何かくと思ひつゝ、もう帰られてゐたらと思ふのと帰京後、毎日あれこれの俗用とそこへ大阪から来客があつたりしてその後へ又京都からの知人が来、何んだかだで御手紙を上げるひまもなくなり失礼しました。

御便りでいろくの様子が変わり、たのしく又嬉しく拝見しました。夫婦の人の引返した清津峡、成程大変な処だったナと今思出して居る処です。魚も釣れず石もなしと来たら、それに雨でも降ると吃^驚御困りでせうね。御便りによると小出氏、店を売却して渋谷へ引込んだ由、どういふわけかナと思ひますね。相当収益が上がって行くものなら、これから先の景気を見越しても益々よいのではないかと思ひますが、どうも私共の様な者には判断が出来ない。弐万円に売つて一万円で住宅でももてばいゝ様にも思ひますが、そう行けばよいが中々さう行きにくいものですね。私の方へは小出君の引越通知はありません。絵はがきの御高吟、面白く拝見しました。

湯の宿や 投げ入れかゆし 野菊かな

(湯の宿に。をやとすれば余韻が生じて面白くなります。)

山の湯や ランプも慣れぬ 文よまむ

(「峡の里 ランプの傍で 文をよむ」をかやうに見ました。如何。)俳句に仲の技前を拝見。この方にも進出の道ある様に思はれます。篆刻と共にやられても其東楼主人の名にふさはしく存じます。

さて図録のこと御慰みにと差上げました。御返送頂かなくて結構です。小出様・高野様にでも御見せ下さつて御入用なければ誰れかに上げて下さつても結構です。自身でもつてゐるより誰か見て下さる方が有難いのですから、どうか御心配なく。

もう十二日から大かた十七日目になりますが、この手紙ももう御帰りになった後へつくかもしれません。食慾は如何です。何卒御自愛を願います。

帰京して十二、三日頃から庭師が来てまだかゝっています。まるで森のやうになつてゐたので、庭から画室からそこら中落ちつける様にしてしまはないと画がかけない方でこの月中は全く駄目です。来月になったら第一に獅子舞をかいとお送り致します。こんど何時^{いつ}ごろ上京されますか。何時^{いつ}でも御出かけ下さい。お待ちして居ります。

ではまた御便りいたします。

二十八日

観風

東平三郎様

「封筒、消印「14.9.28」」

新潟県中魚沼郡倉俣村大字小出

小出温泉古屋旅館内

東平三郎様

侍史

「封筒裏」

九月廿八日

9 十月九日付（一九三九年か）

拝啓。その後無礼しました。温泉より御帰宅後、大分御健康になられた事と拝察して御喜び致して居ります。御滞在の間、御見舞いらしい御見舞いも出来ませず失礼いたしました。どうかこの後いよく御自愛被下います様に願上ます。お互ひに身体を大切にしなければ花も実も咲かぬ事です。どうか小生のこの後の仕事の発展を見守ってゐて被下のが小生としての何よりの楽しみですから、御自身の為、奥様の為には第一に大切な御身体ですが、次に小生の見守り役の為にも是非く御自愛を願上ます。さうして被下事は観風としても実に有難い張合ひのあることです。一生懸命にやりますから尚、背後より御鞭撻を御願ひ申上ます。

さて御帰宅後は嘸かし御多忙だった事と拝察して居ります。小生方も近頃、漸く自分の家らしくなりました。どうか何時でも又御出かけ被下い。御待ちして居ります。

さて帰京しておほかた一十月たちましたが、木村氏（長岡の）の方へ今日、残りの尺三（清津峡）の方の請求をして置きました。この十五日頃までに折返し返事を欲しい、或は口付済みなら送金の事をたのむ意味です。そしてそれには東忠様で尺一の美人画（子夜呉歌）の方は先きに立替て頂いてあるから東忠様へ早速送って貰ひ度いといふ事をも申添へました。尚全部の送金を東忠様へして下さっても結構だからその辺は何れでもよろしくとも申添へておきました。

若しまだ唐美人の方の金が来ません様なら、恐縮ですが御宅からも御督促を御願ひ申上ます。その序でに清津の方のもよろしく願上ます。どうも先方に電話がないので誠に困りますが。それから関氏の方も催促致度思ひますが、もう十月十日になりますので、あの額の作品（桃源）を送ってその時にでもと思ひますが如何でせうか。或は送るのは後にした方がよいでせうか。多分、今忙しいからとか何とかいふのかと思ひますが、貴下の御意見何度存じます。御返事次第で早速手紙を出し度く思ひます。或は御面倒ですが御宅から電話で御督促を願はれ、ば尚、結構ですが。何れにしても今月中にもらはねば先方も熱がさめてしまつて、そういふ程度の金には屈託のない坂井氏でせうけれどもつひ熱がさめると画家の方も同地に居ないといふ事になると切りのない延び／＼になり易く思はれますから、一つよろしく御願ひ申上ます。全氏のは尺三絹本、題「山寺紅葉」です。金五拾円です。何卒御序でに願上ます。

次に中島やの「桃源」の額はどうなりませうか。全氏がとつて下されば結構ですが。とつてくれなければ関氏の方へと、かつて御相談した方法にと思ひます。この方（中島や）もやはり熱のさめないうちに願上ます。もう今月（十月）も過ぎてしまふときとだん／＼工合がわるくなろうと思ひますから、御多用中恐入りますが今のうちよろしく御願ひ申上ます。屏風の方、中島やは多分いけないでせうね。

それから之は全然、私が依頼をうけて来た事でしたが、東の中の会社。もう二十日程も前に作品を送り返して来た。失敬な奴と思ひ、殊に画題までも相談してかいたもので、おまけに作品に魚沼客中とかいてあるからほかへはやれず、又額もあり。不愉快なので今まで手紙も見、何といつてやろうかと考へ、「君の方の高買も注文のものをこういふ風にされて唯々としてゐるのか」とか何とか云ふだけは云はなければ腹がおさまらぬと思つては、こんなイヤな事はだん／＼延し／＼にして積つてゐる用を形付けてゐましたが、今日、何といふ断り状かとあけて見るとたゞ／＼謝り切つてゐる有様。会社が合併する様の状態で云々と書いてゐるのを見ると少し気の毒になつて文句の手紙をかく気が消えて来ましたが、マアこんな状態です。これが只の云ひわけだったらしからぬと思ひますが、ここはだまつて引込めておく方がよいでせうか。実際、人道的にも或は高買の法としても免されぬ事を画かを相手にすると平気で行ふのを実に不快に思ひます。御高見を伺つて御意見通りに致度思ひます。それから獅子舞の方は今月中にお送りする予定で居ります。先ハいろいろ御願ひ旁々右色々御意見御伺ひまで。草々。

十月九日

大亦観風

東平三郎様侍史

「封筒、切手をはがしてあるので消印不明」
新潟県小千谷町古町

東忠

東平三郎様

侍史

「封筒裏」

十月九日

10 十月二十九日付

拝啓。早速ながら此程御送り申上りました色紙、到着致した事と存じますが、その後、御便りを頂かないので如何かと案じて居ります。こちらも灯管ですが御地も同じの事と存じます。それで何かと御多忙の事と拝察して居りますが。或はその後の御身体でもお悪いのではないかと打案じたりして居ります。或は又先達、上げた手紙にウツカリ失礼の事でもかいたかとも心配して居ります。何卒不行届の処がありましたら不悪御願ひ度申上ります。
若し御多用だったら葉書で結構ですから御返事を願ひ存じます。

○実は長岡の関氏紹介の坂井様分を頂戴いたし度、貴家の関氏へ電話被下った御様子なり、或は御都合を伺つて、私から督促もした方よろしければ早速致度と思ひますので御返事を待つてゐた次第です。

○同時に木村氏の様子を何度と思ひます。之も先達、全時に木村氏にも出しましたが一向返事がなく、結局は御序でに御足労頂かなくては東京からは駄目なのかと思つて居りますが如何でせう。

○中島屋の額は戻りましたでせうか？之を関氏の祝ひにといふ話もあったしするので、まだ関氏には何も手紙を出して居りませんが、この（中島屋氏）都合で何とか関氏へ話し度とも思ひますが、これも一向、坂井氏のを送つてくれないのに、この額の方をお祝ひに先きに送るのも如何か、或は後にするか御意見も何度存じます。よろしく御願ひ致します。

屏風の方は御心配なく願ひます。

さて只今帰京前日御依頼の獅子舞会の小品、御送付致しましたから、先方へよろしく御手渡御願ひ申上ります。又全時に拝借の御写真も御返送致しました。之亦よろしく願ひます。

この程、照専寺様の方丈さんから御手紙がありましたが、来月中旬にも御上京、御立寄被下様の御話でした。御用御ありでしたら御一処御上京如何です。では不取敢御案内旁々御伺ひまで。

十月二十九日

草々。

東平三郎様

大亦観風

すっかり秋になりました。小千谷もよいことゝ思ひます。秋のよいのも今少時の間ですね。早いものでもう正月までは二ヶ月ですね。奥様によろしく。

「封筒、消印「目黒」4.10.29」]

新潟県小千谷町古町

東忠

東平三郎様

侍史

「封筒裏」

十月廿九日

11 十一月八日付

拝啓。追々深秋に向つて参りました。皆様御無事で御暮しですか。毎日御忙しい事と拝察致して居ります。さてその後一向御手紙を頂戴いたしませんので、非常に心配致して居ります。温泉からは大分よくおなりになったお帰りになったのだから大丈夫とは思つて居りますが、御病気で御休みになつてゐるのかと思つたり、いろ／＼して居ります。若し御健康だったら葉書位は御多用でも一寸頂けるのではないかと考へると、之は何か小生に落度があつて御不快されてゐるのではないか。或は誰れかつまらぬ中傷か何かあつて（そんな覚えもありませんが）、立腹されてゐるのではないか。それとも御病氣かと、あれこれ心配をして家内とも話した事ですが、小生の至らぬ処があつて御不快されてゐるのでしたら何卒不悪御願ひ申上ります。何もかも御洩し頂いたら結構と存じます。一度奥様に御たづねしやうかとも思つてゐる次第ですが。何にしても遠方なので心配いたして居るばかりですが、御返事頂けるならば何よりです。先達、色紙を奥様に差上げたのも又、後から獅子舞の幅を御送り申上げましたのも、多分到着いたした事と存じます。

次にこの六日に長岡の関様から坂井様の分として金五拾円を私方の振替へ払込

んで下さいましたが、只今御礼状を書いて出しておきました。多分、御電話でも御厚配いたゞいたので御送金被下った事かと存じます（閑様へは全然、私方から御催促しませんでしたので）。厚く御礼を申し上げます。その時の返信に、木村様が少時病臥されてゐて一向何とも云って来ないといふことでした（只今、それで一寸御見舞状をかいて出しておきました）。不取敢近状を御報申上ます。その後の御様子も伺ひ度なのですが、案じながら御伺ひ申上る次第です。乍終奥様よろしく。

十一月八日

観風拝

東平三郎様侍史

〔封筒、消印「目黒14.11.9」〕

新潟県小千谷町古町

東忠

東平三郎様

侍史

〔封筒裏〕

十一月八日

12 十一月付大亦観風画伯揮毫会案内・第三回観風個展成果抄

〔1〕

拝啓。追日冷氣相加ハリ候処、尊堂益御隆昌ノ段、奉賀候。陳者、今般、大亦観風画伯推薦ノ意味ヲ以テ揮毫会ヲ催シ候。同画伯ハ画才縦横、巷間未知ノ逸材トモ可申カト被存候。美術家ノ登龍門トモ云フベキ官展ニハ一顧モ与ヘズ、自由ノ境地ニ於テ彩管ヲ揮ヒ、個展ヲ主眼トシテ、只管具眼ノ士ノ批判ニ俟タントスル、最モ至難ニシテ而モ迂遠ナル途ヲ択ビ居ルモノニ有之。幾度カ其ノ態度ノ時宜ニ適セザルヲ難ジ候モ遂ヒニ翻意セズ。其ノ意志ノ実ニ鞏固ナルニ動カサレ後援致シ居ル次第第二御座候。

画伯過去ノ個展ニ対スル画壇ノ批判等ハ別紙第三回個展批判抄ノ如ク、其ノ画風・筆致捨テ難キモノ有之。将来必ズ大成スルモノト期待致スモノニ有之候。

今次ノ文展ハ総体的ニ其ノ批評余リ良好ナラズ。一面ニハ文展廃止論サイ台頭致シ居ルヤニ及聞候。

此ノ時ニ当リ画伯ノ如キ従来ノ行キ方ハ慥カニ先見ノ芸術的良心ト被存候。御尊家ニハ多数逸品ヲ御秘藏被遊候事ニ候ヘバ甚ダ御迷惑ノ儀トハ拝察致シ候ヘ共、隠レタル美術家御推折ノ思召ヲ以テ是非、御後援賜ハリ候ハゞ幸甚ニ御座候。此段、得貴意候。 敬具

追テ、揮毫料ハ絹本尺三巻金百円、同尺五金巻百式拾円ニ有之候条、御賛同被成下候ハゞ同封端書ヲ以テ御回報相煩度。作品ハ一応御覧ニ供シ御意得タル上、御納メ可申候。

昭和十四年十一月 日

武田 清

〔2、別紙〕

第三回観風個展成果抄

小室翠雲先生書信

大亦観風画伯作品鑑賞会

―漂流異聞五巻、今朝拝見致候。自由奔放之筆と文章の周到等、病後を慰め申候。南画にて絵巻を描きたるもの崋山目黒詣・蕪村の奥の細道等ある耳。珍しき作と存候―

東京朝日

―静かに南画道に精進してゐるこの作家の作品には確かに独自の画境がある。即ち紀州熊野川の鮎漁に取材した「秋漁」は淡彩渴筆の手法に興趣深き自然を写し「山門閑」「社頭夕雨」の静寂なる境地等もあるが、殊に蜜柑船天寿丸の遭難記に画因を求めて五巻の絵巻に纏めた「漂流異聞絵詞」は見応へのする力作。―

読売新聞

―此作家はもつと認められてよいと思ふ―「漂流異聞絵詞」は力作である。人物をあらゆる角度姿態に駆使し、場面に応じての配材、家、樹木、浪、船等は渋滞なく描写され徒らに走らぬ筆技と共に凡ならず。将来がみられると思ふ。

東京毎夕

―出品の中で特に傑出した作は二曲一雙の「鵜飼」と「酈県菊寿」と見た。前

者の如き水墨でよく光を出し、然も在来の鵜飼と異った図柄であることが面白く、後者は色と線の諧調がいゝ。―「漂流異聞絵詞」は―六十二回五巻の絵巻としたものでこれなどは確かに座右に置いていつまでも楽しめる作である。幅物では「春萌」「幽境」「池苑秋趣」「山門夜趣」等々が特に雅味あるものである。

美術通信

―現代絵画の俗流に超然として自己の芸術に精進する同氏の研究作展観だけに日本画壇各方面から注目^されれてゐる。

美術世界

観風個展はいはゆる売品目的のそれと違つて自己近來の画業を世にとふと云つた感じの研究的な仕事ぶりであつた。やはり南画人だけに水墨風景画に長じ、情緒と飄逸をたゞよはせて楽しかつた。巻物「漂流異聞絵詞」は流石に努力の仕事である。この巻物あつて展観の意味を深くするであらう。

日本画雑誌「白日」

本展の庄巻は主催者の自讃に俟つまでもなく「漂流異聞絵詞」五巻の大作であらう。文絵共に脱俗飄逸の趣があり、一家の風を為してゐて作者の技倆を識るに十分である。全巻何れも要を得た描きぶりで、画中の人物がよく躍動して居り面白いが、殊に難船の巻ヒヨンコン物語の巻、唐土見聞の巻が秀抜である。―主として紙本、水墨、淡彩に南画の古趣を示して作者観風の気概と、意気をよく誇つてゐた。

美の国

―氏は南画伝統の正しい認識の上に立ち、芸術をメチエからではなく、エスプリの上で一步進めてゐる。既成の団体にあき足らず、又従來の作家の制作態度にあき足らない氏は、それらの批判の上に立つて独自の道を歩んでゐる。―「菜園」「秋漁」などは佳作の代表的なものである。―絵巻物「漂流異聞絵詞」は、その迫力に於て、縦横無尽自由活達な筆力は、才知と相俟つて優れ、画面の推移、コンストラクションにもよく注意が払はれ、又着想も人の意想外に出て面白い。―全体から見ても、中の一つを取り出して見ても、そのない良い作品である。

アトリエ

―衆目を惹く長巻の作があつた。―これを目のあたりに展開してゆくと、全く

不可思議な人生問題に思ひを馳せ、身は宛然画中の人たるの感を起こさしめる。蓋し画者大亦氏の飄逸活潑たる妙技の然らしむる所―氏の心境から察して氏が一種の風格ある「新南画」の創作者たることに賛意を表するものである。―突きつめて云へば一個の「大亦流」で宜いのである。―

美術検討

―特異の作風は大いに注目すべく、その孤高清雅の作はよろしく認むべきものと思ふ。十五点の出品中注目すべきは「漂流異聞絵詞」であらう。―素朴簡雅の筆、才に溺れず、巧に百般事象を描破しつくす筆力は凡ならずと云ふべきであらう。溪仙風の飄逸の趣ありて、もとより同巧ならず。作者苦心の存する画であらう。―

画観

―それでもこんないゝ仕事をした人があるだらうかといふやうな三年に一度、五年に一度の発見に自分の寡見を嘆ずることが時たまある。大亦観風氏も私にとってその一人であつた。

「漂流異聞絵詞」―はその描写力には些の不安もなく、鋭い諷刺性と、多分の飄逸さをもつた描法には芋銭河童老の洒脱さにも負けぬ堅実な力量が物語られてゐる。

―技法の豊富さの点では当代画人中の十指に屈しらるべき一人と言っても過言ではない。

―實際のことを書けば「七弦会」の「花と実」(抄者註古徑氏)などを観た時には到底起らなかつた感激が「漂流異聞絵詞」を見て感じられたのだ。大亦観風氏の個展は昭和十三年度に開催された、どの個展と比較しても最優位に座るべき資格^{る能力}あものである。―

かゝる作家を厚遇すべき礼をさへ忘れてゐる日本画壇の現状を悲しむものである。

以上

○右ノ外作品写真ノミ掲載ノ新聞雑誌ハ省略ス
○傍線は抄者記入

13 十二月二十一日付

拝啓。だんぐ押せまり年内も余日なく相成り候。御地は嘸かし寒冷の事と拝

察。此頃御身体の工合如何候や。温泉行以来、大分よろしく相成候や御案申上居候。御自愛願上候。さて本日明春の辰年二因み「登龍」の小品一幅御送り申上候間、御笑覧被下度候。益々御発展被遊様、意をこめて御祝ひ申上候心持御酌み取り被下候はゞ難有存候。作は相当の出来のつもりに御座候。御発送と同時に高野様へも小出様、田中市兵衛様へも色紙一葉贈呈仕候。

こんどの正月は東京も門払も廃止の向きも多き由、小舎も世間に慣ひ内輪にいたすべ候が、画室の新年試筆会は又催すべく候。多分十五日の日曜かと存候が、こんどは手狭ながら画室にて致度、親しみあるなごやかなる会に致すべく考へ居候。何れ御案内差上ぐべく候も、もし御上京の御序でも候はゞ是非御来会、光彩を添へられ度願上候。こんどは芸術院会員の建畠氏も参会する様すゝめてくる予定に御座候。

案としては会員の色紙展覧、抽籤、試筆合作、課題席上、新年蓬萊帖（席上そなへつけの）にどなたも記名、その他かくし芸、何でもよしといふ寸法。午後三時マデニ写真も撮り度候。まだよき智恵御座候はゞ御教示被下度候。処で画悠会々員中の幹事を致居候松沢豊君、この一月一日に湯沢にゆく由。役所の連中とのスキー会に候が、その間「御近くにて候はゞ東忠様に御訪問致度」と申居候。多分四、五日までの間の事と存候。その節はよろしく願上候。小生のかき候衛立にても屏風にても見せやり被下度候。その節、試筆会に対しよき御意見も候はゞ、同人幹事につき御教示被下度候。

さて此間十五日に銀座にゐた小出君より突然てんぷらや開店の通知有之。当日早速喜び旁々試食に参り候。中々こつた店に御座候。元カフエーの跡とかを改造せし為、一万ほどかゝりし由。何にしても銀座のこととて相当高くも売る事だから当れば大成功と存候。一作、画を寄贈する事と相成居候。やはり清月と申居候。

さて、先月二十三日頃御葉書頂戴、その後頂戴せず居候が、長岡の木村氏の方御解決の御由、細かく拝承せざる為、相わからず候も御立替頂き候方は御入金被下候事と拝察致居、安心仕居候がその方は御済みの事に候や。尚、先方に「清津峡」の一作行き居候がその方は如何候や。その方は先方も何も話し居らず候や。委細相わからず候為、「清津峡」の分の係も木村氏へきくわけにも行かず、従つて様子不明の為、その俟に相成居候が如何候や。御返事給り度候。尚、中島屋氏の分の御返事も四、五日後との御便りの為、相待上居候次第に御座候。

中島屋の方もやはりあの「額」はとらざる様に候や。どうにか納まれば難有と存候。

年末御多用の事と存候が結果御一報被下候はゞと相待居候。御多用中故ハガキにてよろしく候間、同封のものに願上候。

又いつか松月の菓子のか紙とか何とか希望の様に貴家より伺候が（或はきゝあやまりか）何時にても大ききわかり候はゞ描き可申候。但し貴家を通じてに致度候。先ハ色々一度にかき候為、ごたゞ致候へ共、御判読被下度候。又正月中にても一日二日御地へ参れる様の事にもなればとも存候がこれは未定。

終年ら奥様によりしく御申上被下度候。今年の夏滞在中の奥様の御心尽しを思ひ出すと何とも御礼の申上様も御座無候。しみゞ難有存じ居候。わけてよろしく御申上被下度候。何卒よき新春を御迎へ被遊事を祈上居候。又年賀状は事変中、失礼申上べく候。

十二月二十一日

草々、不一

東平三郎様侍史

大亦観風

「封筒、消印「目黒□12.21」

新潟県小千谷町下町

東忠

東平三郎様侍史

「封筒裏」

十二月二十一日

14 大亦観風名刺に書き込み

「裏面」

拝啓。小生画室ニテの画悠会の会員で昨年正月御会ひの事と思ひますが松沢豊氏、此程御手紙にも申上ましたが湯沢から伺ひますから何卒よろしく願上ます。

「大亦」「朱文楕円印」

東忠

東平三郎様

一九四〇年(昭和一五)

15 一月四日付

先づ明けまして御芽出度う御座います。昨年は実に非常なる御厚情を忝しました。厚く御礼申上ます。今年もどうか、何分、御後援御願申上ます。奥様にもよろしく御申上被下。

今日今頃(午後三時ですが)、松沢君が多分伺つてゐるところではないかなと思ひつゝ之を書いて居ります。

さて御懇書、三十日に頂きまして、早速御受けも御返事もと存じましたが、やはり世間並に忙しくごたくしてゐてとう／＼後れましてすみません。御同封被下いました金八拾円も正に落手。厚く御礼申上ます。御手紙によりますと商工会等、公けの事でも御忙しい由。いろ／＼のものが統制されて配給難のため、御困りのこと、拝察して居ります。組合長の方も当然すぎる信望を得てゐられるのですから御活躍振りを期待して居りますが、どうか御身体を大切に注意されながらに願上ます。非道い胃下垂だそうですね。十二時までも立つゞけもいけないのでせうね。何とか好い方法で御自愛下さい。然し少しよい方に向はれてゐる御様子、少しは安堵して居ります。マア酒など節制される方がいゝでせう。

「登龍」早速、表装して下すつたそうで、御蔭様で見栄える事と喜んで居ります。

さて長岡の方、御多用の処、度々御出かけ頂きまして御迷惑をおかけ致しました。木村氏との御交渉いろ／＼御厚意を頂いたこと拝見。有難厚く感銘の他ありません。仲々そこまで御心持ちを持つて頂くこと並大抵のことではないとしてみ／＼有難存じました。殊に貴家に椿の方を御納め頂いたこともその御志、感謝致して居ります。奥様にもどうかよろしく御申上被下い。

又中島屋の方も非常な御厄介を御かけ致しました。何度も／＼御運び頂いた事、御多用の折、相すまぬ事と存じます。殊に御身体の工合がよろしくない時など、さぞかし御迷惑だったろうと恐縮して居ります。就而は只今、御送金頂きましたのは全部、御宅からの御送金なのを思ふと御親切の程、御礼の申上様もあります。この御恩報じは、何よりも立派になつて喜んで頂ける様の位置になる

ことをと益々努力いたします。

それから御話の通り中島屋への五拾円の受取、及び七、八寸巾の長い幅、近日かいて送りますから、送りましたら御宅へも葉書で一寸御通知致します。只今、個人展後援(作品予約の)芳名録について考究中。何れ御目にかけます。その節はよろしく願上ます。こんどは皇紀二千六百年を期して発展をウンと致し度存じます。考へれば今から働き盛りですから、やるだけやり度く存じます。今の交友もよいし、大分面白くなつて来ました。この四日に小杉放菴老に招かれて新年会に出るつもりです。向ふの都合ではこちらへも来てもらはじかとも思つて居ります。

次に只今、別紙の様のこと、この夏に一寸御話しました会を日本橋の方面だけにて小範圍ですが、催して居ります。今これもかき、個展の支度もししてだん／＼多忙になります。中島屋にでも見せてやつて下さい。たゞ御地でかいたのと絹と紙と違ふだけです。

小出君、たゞ今手紙が来て、この間御祝いに贈った作品の表具が出来たと申して来ました。喜んでゐる様です。お客もほめるので自分も嬉しいとありました。さて、元日の午後に鮭と鴨と頂戴いたしました。毎度／＼御芳志厚く御礼申上ます。おいしく頂けることゝ家内も大喜び致して居ります。わけてよろしくとの事です。箱の蓋、確かに到着しました。早速かきます。(二日の午後)

こゝまで書きましたら来客があつて失礼しました。まだ書きのこつた事がある様で、その俥にして置きましたが、早く御礼状を出さねば相すまぬと思ひつゝ、三日の日、その泊り客の為に朝から案内しなければならず、段々おくれました。今日、四日の午後から小杉放菴老の家へ招かれて来まして夜の一時です。こんな有様でだん／＼失礼してしまひました。不悪願上ます。どうもまだ申しのこした事がある様ですが、考へてばかり居ると御受けと御礼とが遅れてしまひますから一先づこれで擱筆して失礼することに致します。

松沢君の小千谷の土産話をたのしみにして居る次第です。

何卒、御身御大切に願ひます。

先ハ延引ながら不取敢。草々。

敬具

一月四日夜二時

大亦観風

東平三郎様侍史

〔封筒、消印「目黒15.1.5」〕

新潟県小千谷町古町

東忠

東平三郎様侍史

〔封筒裏〕

一月四日夜二時

16 一月二十六日付

拝啓。その後又、段々御無沙汰に打過ぎ申候、御多忙、御繁盛の事と存候。さて、正月には松沢君御伺ひ致し、非常に御厄介に相成候様にて、数十人の芸者衆に踊りを見せて頂きしとて、大いに驚き、且つ大喜び致し居候。私方より改めて厚く御礼申上候。反而御迷わくを御かけし恐縮に存居候。

さて、中島屋の方へ、御申越しの通りに受取と小品を送らむものと考へ居候處、御承知の画室の新年会の手配などでかれこれし、段々相遅れ、申訳け御座無候。十四日は非常ニ盛会にて式十人余り。夜になりて画家の友人達参り、メートルを上げ申候。只だ美人がないだけかもの足らず候も蛮声だけは皆ふるひ申候。小出君も参会いたし候。その翌晩、清月のてんぷらを紹介旁々、友人をつれて銀座へ参り候。中々よくはやり居候。

さて、本日、先達御送付の箱書出来候間、御送申上候間、御受納被下度候。それにつれて思出で候が、その節頂戴の鮭、おいしく頂き候。大切に居るのでもまだ少し御座候。厚く御礼申上候。

次に中島屋のこと。此前の御申越しの如く、十四年十二月二十七日は、書留で五拾円（尺三、ヨコ額、桃源之図）東忠様より御立替・領収の意味を、手紙にも受取にもかき、只今発送致し申候。又、小品七、八寸巾のタテのもの一作送り申候間、御序で御笑覧被下度候。図は、上に良寛と弟由之との問答歌をかき、下には遊び女がはじきをしてゐる図に御座候。一月以来会合多く、為にこの事、だんく遅れ、相すまぬ事と存居候が、御用捨被下度候。

只今、御地は積雪多き事と存居候。東京も昨日から朝は零下五度。足の先が冷

たさよりも痛き程に御座候。時候柄御大切に願上候。その後、胃の方如何。御養生願上候。乍終ら奥様（およりさま）によりしく。草々。

敬具

一月二十六日

東平三郎様侍史

大亦観風

〔封筒、消印「目黒15.1.26」〕

新潟県小千谷町古町

東忠

東平三郎様侍史

〔封筒裏〕

一月廿六日

17 三月付観風第四回個展万葉集画撰展推薦文（印刷）

拝啓。時下追日暖和之候、高堂益々御清栄大賀此事御座候。

陳者、本年は我光輝ある紀元二千六百年に遇ひ、御同様慶祝之至に奉存候。此の意義深き嘉沢を記念し、今秋画伯大亦観風氏は第四回個人展開催に当り我古典文学の最たる万葉集に材を折り、発表之事と相成居候。氏素より文学に造詣あり、歌道にも亦精進せらるゝは周知の處、殊に今回之挙は歌壇の耆宿佐々木信綱博士・斎藤茂吉博士、或は文壇の巨星吉川英治先生等の絶大なる協賛を得られ居候。然かも画壇に於ける成果は数回の個人展に依り一家の風格と奔放自在なる技倆とは既に定評有之。小室翠雲・小杉放菴両画伯、建畠大夢先生、藤惣静也博士等々諸大家の御推薦及び画壇批評抄に於ても御高覧之事、更めて贅言を要せずと存候。

此秋に際し、氏の画業をして弥々達成進境の為に同志諸賢の一臂御推折の労を賜り候はゞ、其果期して待つべきもの有之候事は啻に諸家の好評而已ならずと存候。

茲に今回の「万葉集画撰」展の成功を期すると共に諸賢の格別なる御後援をこそ偏に冀上度、如斯御座候。

幸ひ御賛同を得候はゞ本人御挨拶に可罷出候間、芳名録御染筆相賜度、御願申上候。

昭和十五年三月

敬白

(イロハ順)

公爵 岡野 繁蔵

鷹司 信輔

鶴見 裕輔

中松 盛雄

中松 真卿

野長瀬 忠男

八塚 秀二郎

有馬 良橘

男爵 荒木 貞夫

沢田 謙

木村 平右衛門

下村 宏

妹尾 勇吉

定

一、紙本横幅(横巾二尺三寸位)

金貳百五拾円也

右

18 三月三十一日付

拝啓。春暖に相成候が、御地は未だ積雪の事と存候。皆々様如何御座候や伺上候。小生方もどうやら無事。目下、今秋の個人展の準備に忙殺され居候。今年の個人展はかねて御話申上候、日本の千年以前の文学万葉集を絵にする事とて、歌人の大家達ニ相談いたし候処、大賛成を得、大いに張切居候。之より大和地方の写生旅行、九州方面の昔の万葉の跡も訪ね写生致度、その次には又越中にも参り度、その節一年振り御訪ねも申上度と存居候。後援者に明治神宮有馬大将も荒木大将も賛助してくれるし、大分面白く相成り候。只今、別便にて御送り申上候後援者の挨拶状に連名御座候通りにて、今年の個人展は、御後援

諸氏に御報ひすべく懸命の努力仕度存居候。就而ハ先般、御地滞在中、御話承り、又御願申上置候、今秋個展の御後援の件、何卒よろしく御願申上度候。同封申上候、印刷物ハ五部御座候が

貴家と、高野様・小出様・田中様・照専寺様のつもりに御座候が、御多用中恐縮に候が、何卒御序でよろしく御すゝめ御願ひ申上度候。

作品の価格ハ印刷物中定め処ニかき込み居候が、大きサの点、いろ／＼の条件も有之候事故、此前伺ひ候高にては貴意に添ふべく致度候間、何卒五人様をよろしく御口口願へる様、御尽力御願申上度候。何れ又御面謁申上候節、展覧会諸費用の計算等、細かき事申上候が、御後援頂き候分は、全部展覧会費用として使用すべく、手元には一切不残、否、或は又、借金に相成べきかとも存居候次第に御座候。

何れにしても御尊家様の御後援御期待申上居候事につき、何卒よろしく御願申上候。先ハ不取敢。草々。

二伸、連名中、岡野氏はジャワにデパートを持つてゐる貿易商、中松氏は八幡製鉄社長、野長瀬氏は日本車輛社長、木村氏・八塚氏は九州水力の社長・副社長、有馬大将は明治神宮司、荒木氏・鶴見氏・下村氏は御存じの通り、妹尾氏は元精養軒支配人。名前の説明、右の様に御座候。

何卒、御地の方の御力も頂戴致度、わけて御願申上候。
乍終、奥様によりしく願上候。

草々。敬具

三月三十一日

大亦観風

東平三郎様侍史

「封筒、消印「目黒[5.4.1]」

新潟県小千谷町古町

東忠

東平三郎様侍史

「封筒裏」

三月三十一日

19 六月二十七日付

拝啓。此程は久々御邪魔、御忙しき処を失礼致候。奥様も相かはらず御元氣、何よりと存候。その節、何時ながら御歓待を忝し候。厚く御礼申上候。殊に又、いろく御配慮を賜り、御懇情感謝の他なく候。旭日の図、そのうち御送付申上べく候。又、その節、御願申上候、五人の方の御後援の方、何卒よろしく御願申上候。帰京の節は又、御土産頂戴、難有御礼申上候。子供達大喜び致居候。家内よりもよろしくとの事に御座候。

あの翌日、引続いて出発。関東方面は後廻しに致居候為、この機会に廻らざれば、一度家に落付き候はゞ、もう疲れもいで、時期を失する恐れ有之候為、筑波山に登り候。真間にいで、漸く昨日帰京。これにて予定の処は全部完了いたしました候事にて、この次は図書館につめ切り、風俗史の研究に御座候。準備は充分に致し、一気に制作可仕存居候。是非よきもの作る確心に御座候。箱もそのうち御送付可仕候。先ハ不取敢、御礼・御挨拶まで。皆々様によろしく願上候。

二十七日

大亦観風

東平三郎様

「封筒」

越後小千谷町古町

東忠

東平三郎様

「封筒裏」

六月二十七日

20 八月二十二日付

拝啓。その後、御無沙汰いたしました。もう残暑にもなりました。皆様、相不変御丈夫ですか。帰京後、関東でまだ残つてゐた筑波と真間とを写生して来て、それから画室にとちこもり、今まで二ヶ月半、朝から夜更けまで殆ど外出もせず努力しました。やっと六拾五枚の線書だけをへて、これから色彩です。六

拾五枚の三倍位はかいてゐる訳ですから、相当疲れました。然し、今頃ゆるんでゐてはいけない。その彩色と別口の十枚余もかゝねばならぬので大変です。こんなわけで御依頼の内山氏のが遅れました。途中で別なものをかくと、気分がかわるので一段落つくまでつづけたので遅れました。この程から一寸気をかへる日が出来たので早速とりかゝり、漸く一作を得ましたので、かねて持帰りました箱書と共に御送りいたしました。波は静かな波にしております。先方へよろしく御願ひいたします。何時も何から何まで、御厚配難有、厚く御礼申し上げます。この程、高野様の令息がお出でになり一夕歓談しましたが、その節も作品の遅れてゐる申訳を伝へていたゞく様に頼んでおきました。

さて次に、例の今秋の御後援の方、一つ御多用中恐れいたしますが、高野様・小出様・照専寺様・田中様の方々へ、此程御相談申上しました方法で御後援頂く様の事を、早速に御願ひ出来ませんか。遅れてしまひますと、意味をなしませんし。段々、費用も入用になりますので、是非御願ひ申上ます。その御話し下すつた御様子を是非御きかせ頂き度いのですが。又どうしても最後は私が伺はなければならぬならば、朝いつて晩に帰る様の方法でも伺ひますから、よろしく御願ひ申上ます。

それから今一つ。今度の展覧会に御厄介を願ひ度い事は、お宅の衝立の那智の滝を拝借願ひ度いと思つて居りますが、願へますか。那漠としては万葉の歌にないのですが、「み熊野」と題をつければ関係がありますので、そうして陳列し、画集にも写真にしてのせ度く思つて居ります。尤も裏画はかくしてしまつて、額の様にして展覧したいと思ふのですが、一つ御願ひ申上ます。拝借願へれば私が伺つて持ちかへるか、何かよい方法を考へます。無論、運送は私の方でさせて頂きますから。損傷などない様にします。絶対、御安心下さい。

又、五人の方の御後援の方、何とか五人の方だけの後援会の名目でもつて頂いて、今後の私への特別の關係にして頂ければ、之にこした結構なことはあります。御多用中、御返事はかけないでせうが、願へるならば、御返事待たします。乍終、奥様によろしく。先ハ右御願ひまで。草々。

大亦観風

八月二十二日

東平三郎様侍史

「封筒、消印」[目黒15.8.22]

新潟県小千谷町古町

東忠

東平三郎様侍史

「封筒裏」

八月二十二日

21 十月五日付

拝啓。本日夕刻、鉄道小荷物で御衝立、無事到着いたしました。難有御礼申上
ます。私が伺って拝借する心組でましたのに、御多忙の処を、之は実に恐入
りました。何とも御礼の申し様ありません。防空演習で御忙しかったでせう
のに、中々大変でしたでせう。よい箱なので実には大丈夫です。厚く御礼申
上ます。御返事頂かなかったので、駄目かナと思つて心配してゐました処でし
た。之より之の縁縁をつくつて陳列したいと思ひます。大切にしますから御安
心下さい。裏の方は、仮にトりの子でも丈夫に覆をして、滝だけ出します。難
有御座いました。

さて、又、御後援の方は一つ御申添へ願度存じます。そろ／＼費用が入用の様
に迫つて来ましたので、何とか御尽力願へませんでせうか。私が伺つた方がよ
ろしければ、一、二日なら何とかして伺ひます。今後の十点程のもの、一生懸
命かいてゐる処です。では不取敢、御礼まで。

草々

五人程の方の先きに拝借出来れば何より難有存じますが、御意見如何で
せうか。

十月五日夜

東平三郎様

侍史

大亦観風

「封筒、消印」[目黒15.10.25]

越後小千谷町古町

東忠

東平三郎様侍史

「封筒裏」

十月二十五日

22 十月二十五日付

拝啓。その後、忙しさに失礼しました。もう私の展覧会期日も迫りましたので
大多忙です。会期は十一月二十一日より二十六日までです。白木デパートの五
階です。

作品も相当の出来のつもり。こゝ二、三日のうちに写真を取り（拝借の滝も）、
画集の印刷にかゝります。出来上があれば早速御案内状とともに送り申す。
さて過日御願ひしておきました五人の方々のを一つ承諾被下ば、御集め頂いて
御送金願へませんか。段々必要に迫られてゐますので、画集印刷などもすぐに
払はなければなりませんので、一つ御願ひ申上ます。出来ればお宅の分だけで
も先きに御送り願はれゝば、何より心丈夫です。

振替の口座で願度存じます。

東京四二三七〇番。住处・名前は御存じの通りです。宜しく御願ひ申上げます。
他の方々の方、如何でせう。御返事頂き度く存じます。先はとりいそぎ右まで。
草々。

十月二十五日

大亦観風拝

東平三郎様侍史

御面倒ですが、御返事待上げます。

23 十一月四日付

前略。この様なエハガキが出来ました。今、画集にする様、印刷に出してあり
ます。このお宅のツイ立非常によく写真にとれたと思ひます。尤も画室で又、
手を入れました。

ところで先便でおたのみしました軍資金の方、御送り願へますか。エハガキ二
百円位払ひましたし、ドン／＼かゝるのでよろしく早々に御力を願度く存じま

す。五人の方を取まともお願い申します。こんどは会場がいゝし、いま大多忙で、一生懸命です。奥様によりしく願上ます。

「上段、消印「目黒」[5.11.4]」

新潟県小千谷町

東忠

東平三郎様

東京中目黒

大亦観風

十一月三日

24 十一月十六日消印

「封筒、消印「目黒」[5.11.16]」

新潟県小千谷町

東忠

東平三郎殿

註

1 大亦観風に関しては、『万葉を描いた画家 大亦観風展図録』（二〇〇四年、奈良県立万葉文化館）、福田道宏「大亦観風《万葉集画撰》と小千谷」（『月刊奈良』四八四号、二〇〇八年、現代奈良協会）、同「大亦観風《万葉集画撰》の大和国史館献納」（『月刊奈良』四八五号、二〇〇八年、現代奈良協会）などに詳しい。

2 二〇〇四年十月二十三日から十一月二十八日開催。その初日、中越大地震が起こり、東忠や松月堂はじめ、小千谷の所蔵者から多数の作品を借用していたが、ご所蔵者のみなさんに展覧会を見ていただくことはかなわなかった。

3 大矢頼音「田中一村、団体展への挑戦―日展・院展出品を中心に―」（『生誕一〇〇年記念 田中一村展図録』二〇〇八年、奈良県立万葉文化館）が明らかにした、幻の田中一村の例は極めて例外的なものと言える。

4 『日本近代史辞典』（一九五八年、東洋経済新報社）所載の「東京正米平均

相場月別表」によると、一九三九年の米一石あたりの年間平均は三七・一三円、大阪堂島商品取引所ホームページ（http://ode.or.jp/market/his_index.html）、二〇一四年二月二十八日閲覧）で二〇一一年から二〇一三年の米価を見ると六〇キログラムで一五〇〇〇円前後である。一石を約一五〇キログラムと考えるなら、現在は三七五〇〇円となり、ほぼ千倍という計算になる。前掲註¹。

5 一九四三年、錦城出版から豪華装丁本が『万葉集画撰』として刊行された。

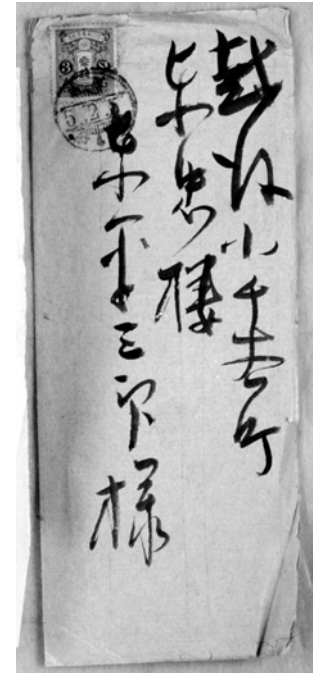
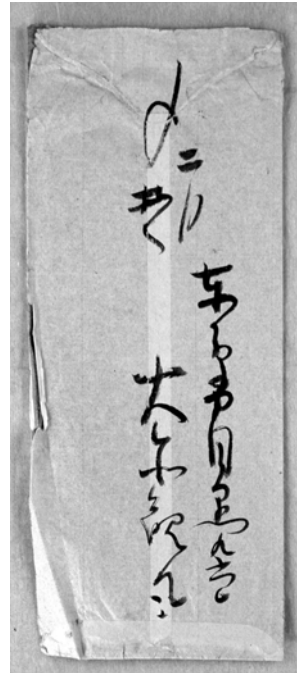
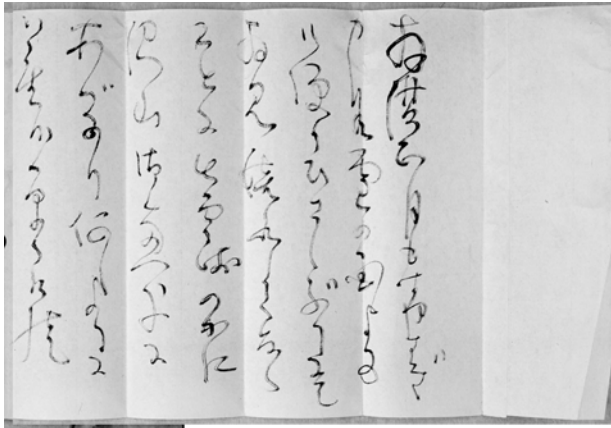
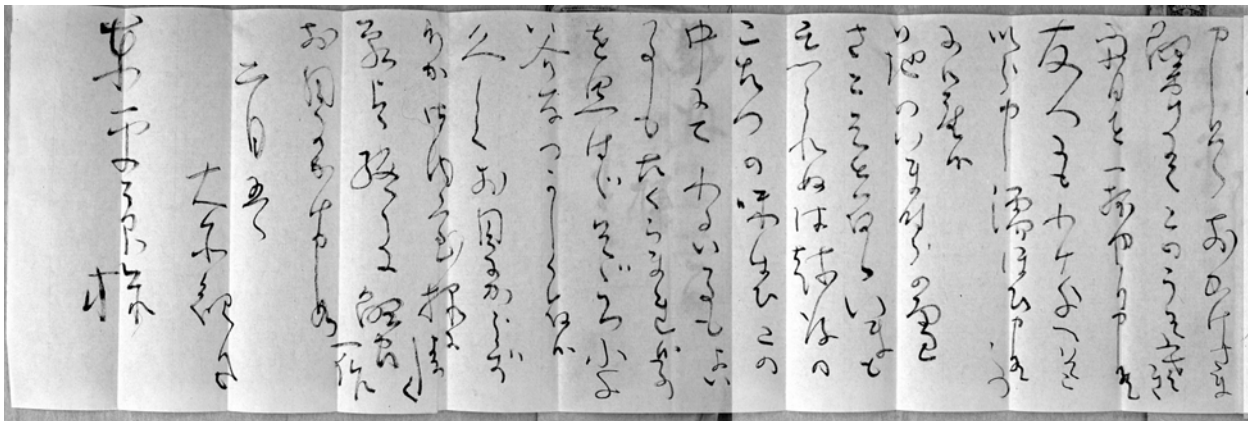


図7 (書簡1、割烹東忠蔵)



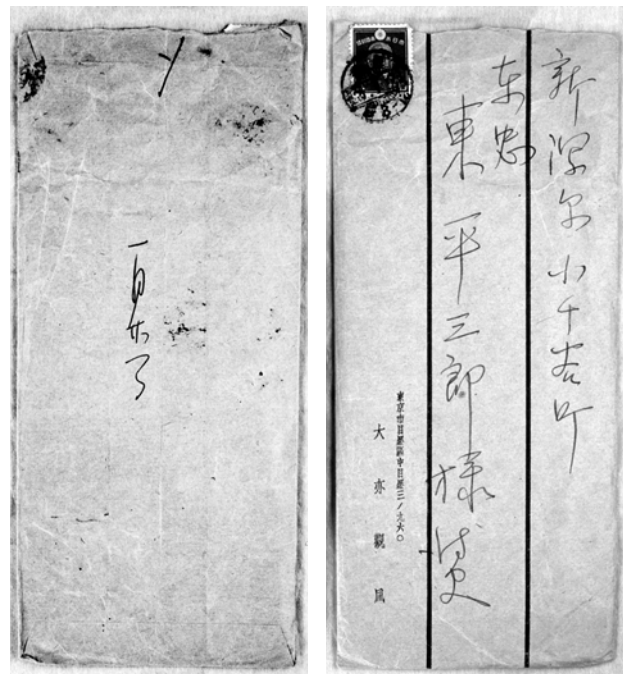
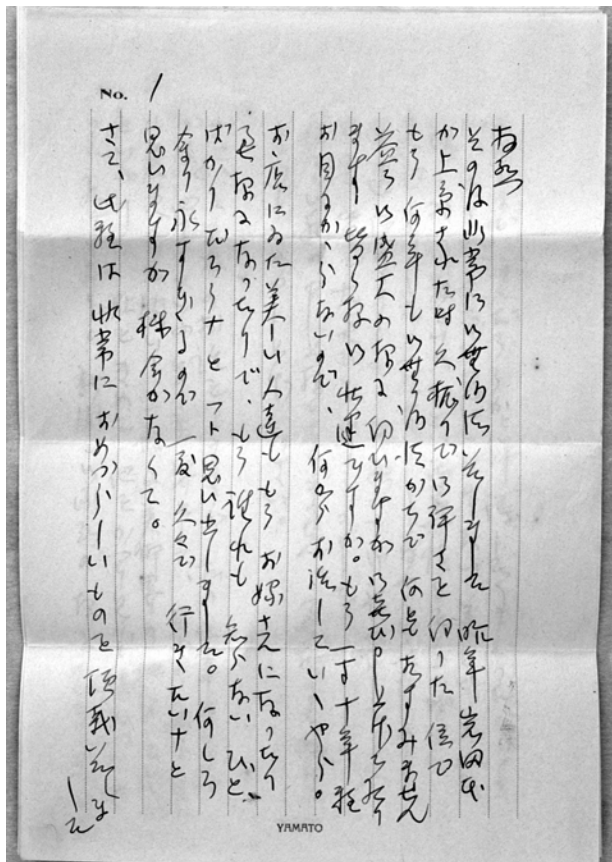
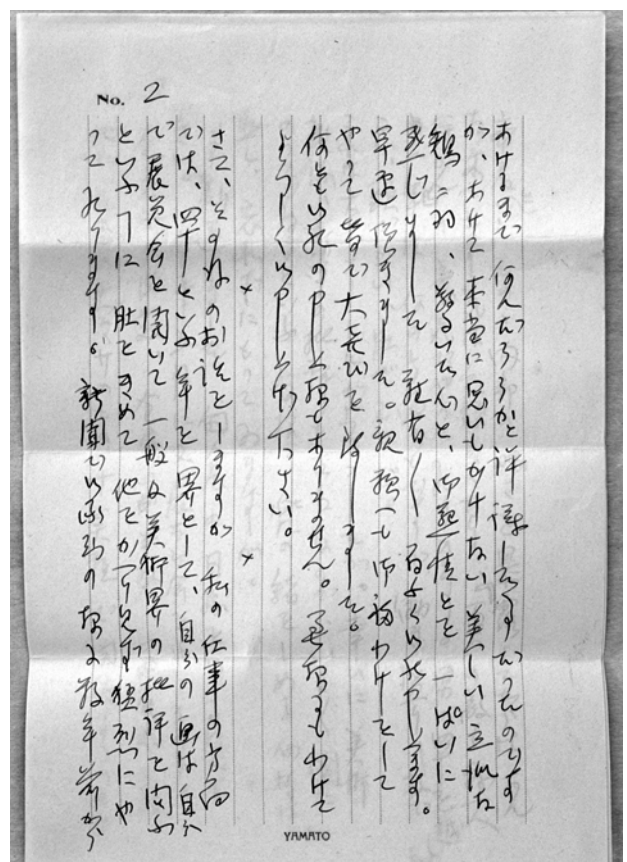
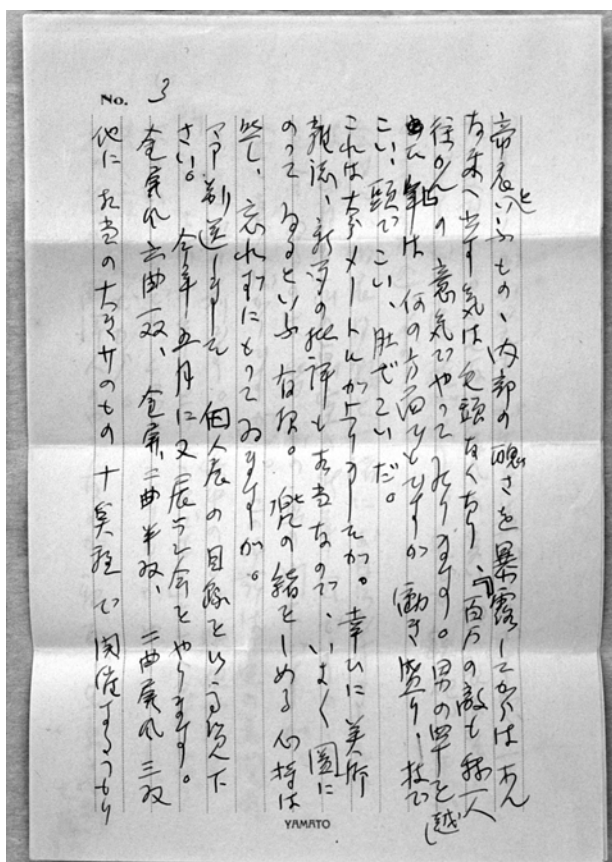


図8 (書簡2、割京東忠蔵)



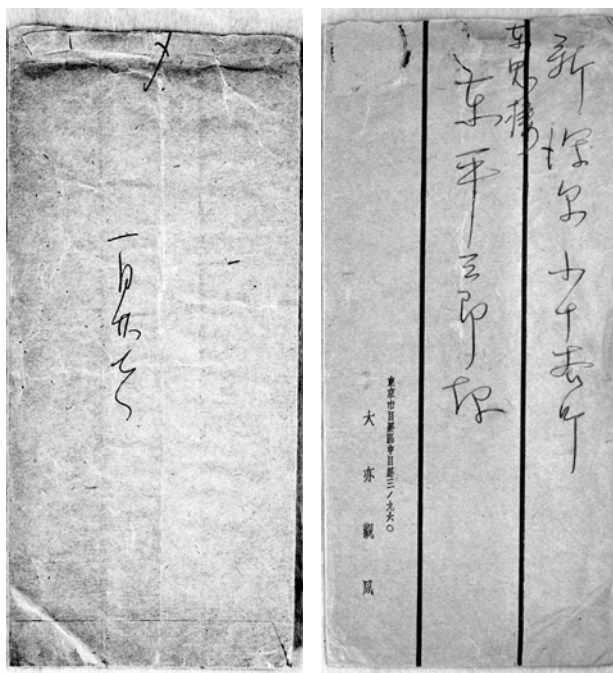
No. 4

ひつ一人のかんをわかれを並べたのすゝめ、
大要り。こんな風に多い仙人はよく
ない。わかれは確です。笑ひも顔配でもあ
いの意気込みです。

今宵に、仙居月と一掃にお目にかかるといふのは
五月の月の画室の新筆会です。こゝに
参入する人は皆、新の画の内下です。か、
(おもしろい事人ばかりです)。この絵は、定の玄白前
の庭池の前です。雲甲のよい腕廻かし、
フントまあが年のとりなことでせう。さて云はならぬ
下さい。之で千三トニよりちんかやると、大々
若くなるんか。

私の前の西洋人のやつな、か、夜更けにあまき
高科
大子の

YAMATO

[illegible]

いやは一丈程と有るにや 移けおろそねえか
おけにはさうぞ

さて、唯我々多かりて^後おぼへにもと。少少の
他人をよめたり通ひしやが、此等の個人展
は全く意からずして又御書者にも新圖、ま所
親極す全く之をばり字にとそのこの時
評をきかくよりしりと有る 少也
は少し一偈の系ありて帝衣、文展は絶好なま
自らは自にお押し通なり定使よいとく加
かくのみや又御書者にては いよく断いて
親風は親風一偈ゆくと「肚とかいふた、
只今これのいふと全對し華折親極のこの
一冊を以別をせしむがい希むという人下賞
さうわおもしろ」と云ふ冷汗をかり可申

久しう存ねを物よりいふや
 南へ臨むこの刻りの庭松は播し又すありの松
 うそ一休をすう友こそすう一りといふた、出平
 今を命に送行りしとてうり助はともい、
 といふをぬぬに死なうと也泣きしうそ
 一りもて
 ちぬぬ風